

加代が六歳のときだった。そのポスターは、真ん中で白い衣装を着けた女性バレーナが、美帆のとそっくりのポーズをとっていた。その人は日本を代表するプリマで、この場面は『白鳥の湖』の主演に扮しているのだと電機店を営んでいた父から教えられた。加代の実家は店舗付き住宅で、店は狭く五坪ほどしかない。店の入り口近くの板壁に音響機器メーカーのその宣伝ポスターは長いこと貼ってあった。ポスターは他のメーカーのものもあり、あちこちに貼ってあった気がするが加代がはつきり思い出せるのはこの一枚だけだ。

店には町の内外から修繕に持ち込まれた電気製品が多くて、修理台は店の半分近いスペースを占め、売り物の商品は申しわけ程度に並べてあったようだ。当時は「物を売って儲ける気はない。俺は技術でこの商売をする」と言うのが父、政一の口癖であった。

政一は幼いとき父親を失くし弟の章二と共に母親の手で育てられた。少年の頃は新聞配達などで家計を助けていたが、十五歳で指物店の親方のところへ年期奉公に入った。そこでは人が三年かかる技術を一年そこそこで身につけたそうだ。しかしそれだけでは満足しなかった。昼は箆笥を作り、夜は佐野電気店に通い、好きな電気の勉強に没頭したという。

父は二十五歳で電機店を開いた。その翌年見合い結婚をし、やがて長女の加代が生まれようやく安住できる家庭を持つことができたようだ。加代の母親は無邪気な性格で、嫁ぐ前は洋裁店に勤めていた。結婚後は二人の娘、加代と弘子を育てながら家業を手伝った。近所の女の子が千寿香のもとで日本舞踊を習っているのを聞き、三歳になった加代を入門させたのは母であった。父はしげしげながらその際は承諾

したそうだ。

加代が小学校に入った春、師匠の千寿香は町内の映画館、昭栄館を借りきって日舞のおさらい会を催した。それは企画のうちから町中の話題になり、加代もうきうきしながら稽古にはいちだんと熱をいれていた。

しかし準備が半ば進んだとき、加代の父は「そんなものは、金持ちがする道楽じや」と、思いを爆発させた。いったん口にするとうちは頑なだった。加代の出演は取り消され、稽古も休むことになった。母はおさらい会が終わったら、また頼んで入れてもらおう、と加代をなだめた。しかし何日か経つと、稽古場の棚に置かせてもらっていた風呂敷包みを引きあげに行つた。包みの中には着物と三尺帯、それに稽古用の舞扇が入っていた。

舞扇は加代が入門して半年余り経つたとき、師匠の千寿香が譲ってくれたものだ。新しいものは硬くて扱いにくいし、と師匠は前置きして、

「私がお稽古に使っていたものですが……」

言いながら加代に華霞模様の扇を握らせてくれた。同じ年頃の子供たちより遅れて入門したので、それとなく気を配ってくれたようだ。他の子は皆、新品を買っていて輪郭の鮮やかな京人形の絵柄だった。そのとき母は喜び、加代本人より感激していた。

「この扇で稽古すれば、加代もきつと千寿香先生のようにお師匠さんになれるよ」

それが、父の反対にあつていらしい人が変わったようにその話題を避けるそぶりをみせる。

母は四尺箆笥の前に座り、稽古場から持ち帰つた包みを開く。そして着物と三尺帯

をたたんだままそつと両手で捧げ、形を崩さないように引き出しに納めた。

そのとき扇が母の膝下に滑り落ちた。気づいた加代が手を伸ばそうとしたが遅かった。母が素早く拾って立ちあがり、加代の手が届かない箆笥の上部の扉を開けて小物類の入った棚の一番上の段にそれをしまった。

稽古にいけなくても扇だけ取り出して洋服のままでも、家の座敷で踊りたい。

練習しておかないと、習ったことを忘れてしまい、ほかの皆より下手になってしまふ。でも見つかるかと父に咎められ母もきつく叱られるのではないか。加代は扇を出して欲しいとはどうしても言い出せず、日が経った。

おさらい会の日、会場である昭栄館の電気装置の仕事を父が請けていた。母が気をきかせて、連れて行くよう頼んだのだろう。加代は胸にフリルのついた淡いピンク色のワンピースを着せてもらい大好きな赤い靴を履いて、父と一緒に昭栄館へ入った。

舞台上手の楽屋隅に電気機器の据わった板敷きのコーナーがある。そこが父の担当で、舞台と客席、両方が見渡せる位置だった。照明や音楽の係などが出入りし、父はそのつど、機器の調整に忙しく、連れて来た加代が狭いコーナーの隅で正座しているのは眼中にないようだった。

幕があがると加代は舞台の煌びやかさに目を奪われた。小学生の弟子は加代を除いても、あと五人いた。それぞれが数回ずつ出演したようだ。どの演目も加代は習い終えていたので自分が鬘や衣装を着けて舞っている錯覚に陥り、身をのりだして見入り夢心地になった。

三時過ぎに舞台は終わり帰ってきた。玄関の上がりがまちに腰掛けて靴を脱いでいると母が奥から出てきて横に座り込み加代の顔をのぞき込んだ。

「お帰りなさい。どうだった？」

帰り道、加代は父のあとについて小走りだったので体中の力は喰いしばった口元に寄せられている。

「幸ちゃんや、純ちゃんは、上手に踊ったの」

母は女の子たちの首尾を知りたいのか名前をあげた。その名を耳にしたとたん、加代は細い両の足で脱ぎかけの赤い靴をかつと蹴り飛ばし、小さな手で両眼を覆いわっと泣きだした。

母は驚きのあまり血相を変え、すぐに娘の両脇に手を差し入れ膝に引き摺りあげ、きつく抱きしめた。

「どうしたのよ、どうしたの……」

おかつは頭に頬を擦りつけ繰り返す。

「幸ちゃんも純ちゃんも…踊った…みんな、いっぱい踊った」

加代は母の胸にぐちゃぐちゃの顔を押し付ける。

「加代の踊る分みんなが取った…加代の分もう、ひとつもない…ない…」

あとは声にならず、微かにミルクの匂いがする白いエプロンにしがみついているまでも泣きじゃくっていた。

その日の夕食後、加代は父に呼ばれた。父は店の修理台の前に腰掛けて改まった顔つきで加代を待っていた。

「本当に踊りが好きなのか」

加代は叱られているような気持ちで、立ったまま返事ができずうな垂れた。

「ちょっと好きならいいから。けどなあ……一生続ける覚悟があるんなら、

習ならわせてやってもええが……」

父ちちはなぜか一息ひといき入れた。加代かよの頬ほおはほっと緩ゆるんだ。すると、父ちちは店みせの板壁いたかべに貼はれた大判おおばんのポスターのほうに目めをやり、おもむろに口くちを開ひらいた。

「だがの、これからは、日本舞踊にほんぶようではだめじゃ。世界せかいに通用つうようする踊おどりは、バレエしかない」

加代かよは父ちちが何なにを言いおうとしているのか分わからないまま、視線しせんの先さきを追おった。紙面しめんの中央ちゆうおうに純白じゆんぱくの衣装いしようをつけたバレリーナの写しゃしん真しんが載のっている。その下したの方に横書よこがきで宣伝文句せんでんもんくと電機でんきメーカーの名なが印刷いんさつされてある。

写しゃしん真しんは胴どうに巻まきついたスカートより上うえの半身はんしんだが、加代かよの体からだと同おなじぐらいのアツブだ。加代かよの眼めには、凜りんとしたバレリーナの姿すがたはこの世よのものとは思おもえず、画面がめんには何か淋さびしい雰ふん圍い氣きが漂たなよっているように見みえた。

「バレエなら父とうさんも賛成さんせいや」

父ちちは写しゃしん真しんの人ひとが今いまをときめく有名人ゆうめいじんだと念入ねんいりに説せつめい明めいした。東京とうきやうに行いけばこの人ひとに弟子入でしりできる。住すみ込こんでそこから学がっこう校こうへも通かよう。先生せんせいの身しん邊べんの世話せわをさせてもらい、毎日まいにち厳きびしい修しゆ行ぎやうを積つめば、いつか素晴すばらしい舞ぶ台たいに立たてるようになる。父ちちは成功せいこうへの道みちをながながと語かたる。

「その代かわり、この家いえには居おれんぞ。一人ひとりでも頑張がんばれるか、覚悟かくごしてかからないか
ん…本ほん当とうに好すきなら……そのぐらいの苦勞くろうは……」

加代かよは瞼まぶたの奥おくがじいんと痛いたくなった。そこへ入門にゅうもんさせられた自分じぶんの姿すがたが脳裏のうりにちらつく。フランス人形にんぎやうみたいにはっちりしたバレリーナの眼めに見据みえられ、うつむいて夕飯ゆうはんを食たべている自分じぶん。夜よるになっても家いえには帰かえしてもらえない。四角しかくい板いたの部屋へや、

ちいさな布団……。

「イヤや、うちは行きとわない。踊りなんかやめる……」

加代は涙をぼろぼろ落として首を横に振る。そうしても、なお東京へ行く汽車に無理やり乗せられてしまうのではないかと怖れた。

いま考えると、父は奇抜な発想をする人だから脅しのつもりで話を持ち出したのかもしれない。そのうちいつしか本気になって夢を描いたのではないだろうか。この日から、加代はしまわれた舞扇のことを忘れ、二度と手にすることはなかった。

あれから四十年余り経った。長い間、会っていないが実家の両親はいまも健在だ。舞扇はあのままだろうか。着物と帯は、祭りの日などに妹の弘子が着ていたから自分のものではない。けれど扇はべつだ。師匠がくれた褒美の品といえるものだ。嫁ぐとき身辺の物はすべて家から持ち出したつもりだったが、そのとき扇のことは頭に浮かばなかった。父の反対を押し切ったの結婚だったから、気兼ねしながらの荷ごしらえは慌しかった。

加代は掛け布団を顔の半分まで被り目を閉じたが寝つけそうにない。首を捻って枕元の時計を見る。深夜の十二時を少し回っている。早く眠らなければ明日の仕事に差し支える。ベッド脇に手を伸ばしラジオを点け、タイマーを一時間後に切れるようにセットした。男性アナウンサーの穏やかなトークと音楽が交互に流れてくる深夜番組が始まっていた。明かりを消し、いつものように耳をラジオに集中させると、疲れた身体が瞼の内に深く沈みこんでいく。加代は今夜の特集であるロック・クラシックスを聴きながら眠りに落ちた。

(以上11月21日放送分)